

中学入学以前の英語学習に関するアンケートおよび効果の分析
 - 高校生の場合 -

Analysis on the Questionnaire and the Effects of English Learning in
 Pre-Secondary Education - In the Case of High School Students -

キーワード：早期英語教育、学習経験、学習者への影響

内藤 徹

NAITO Toru

1. はじめに

近年、早期の英語学習への関心が高まり、いろいろな議論がなされている。小学校またはそれ以前から英語学習をはじめた方が効果があるとの意見もあれば、日本語学習が充分になされ、より抽象的な思考や分析ができるようになってから行った方がよいとの意見もある [大津(2004)等]。2002年4月より、小学校において「総合的な学習の時間」が行われ、国際理解教育の一環として英語の活動が行われているところが多い。文部科学省(2001)は、『小学校英語活動実践の手引』の中で、公立小学校における英語活動のねらいを「言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうことが重要である」(P.3)としている。

前回の内藤(2004)に続き今回も、高校生を対象に、中学入学以前に英語学習をしたことのある「英語学習経験者」(以下「経験者」)と「英語学習未経験者」(以下「未経験者」)をアンケートと実際の成績を比較することにより、その影響の有無について分析を行った。

2. アンケート調査・分析

(1) 被験者

S 高等学校 1年生 111名、2年生 114名、3年生 120名 : 合計345名

(2) 仮説

中学入学以前の(英語学習)「経験者」は、「未経験者」と比べて、より英語の学習に興味・関心を示し、学力も高い。

(3) 分析方法 [Hatch(1982)、内藤(1997)]

χ^2 -test = χ^2 検定 (アンケート等の数値の有意差検定)

Tables 1 ~ 9

t-test = t 検定 (2つの平均点の有意差検定 : この場合、標準偏差も用いる)

Tables 10 ~ 12

有意水準は 5%、1%、0.1% の3つの水準

など

(4) 結果と考察

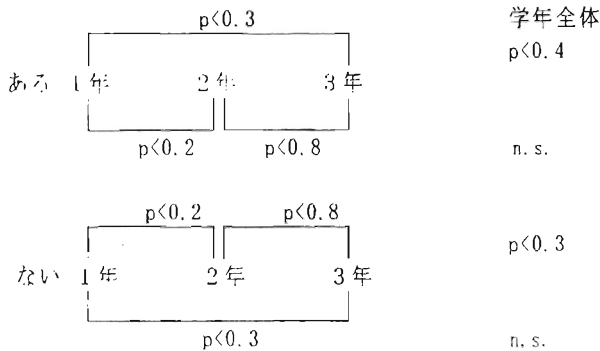
Table 1 中学入学以前に英語を学習したことがありますか (数字は百分率:以下%)

	1年	2年	3年
ある	49	63	60
ない	51	37	40

[以下学習は英語学習]

横 p<1.0 (合計は100%である)

縦 *p<0.02



☆「経験者」

Table 2 学習の期間は何年間でしたか (%)

	1年	2年	3年	4年	5年以上	1～2年
1年生	45	44	11	0	0	89
2年生	38	47	6	9	0	85
3年生	64	20	4	8	4	84

Table 3 学習の手段は主にどれでしたか (%)

	学校	学習塾	英語教材(家)	家庭教師	TV	他
1年生	31	63	6	0	0	0
2年生	67	22	8	0	2	0
3年生	64	25	7	2	0	0

Table 4 学習の頻度はどれでしたか (%)

	毎日	週3以上	週2	週1	月2	月1	その他
1年生	0	0	19	75	3	3	0
2年生	5	5	28	50	0	11	1
3年生	0	0	29	56	3	11	1
平均			25.3	60.3			

Table 5 中学入学後、それ以前の学習が役に立ったと思いますか (%)

	大変役立	役立	どちらとも言えない	役立ない	全然役立ない
1年生	7	36	32	12	13
2年生	17	24	41	6	12
3年生	9	31	49	7	4
平均	41.3	35.3	41.0	18.0	18.0

「大変役に立った・役に立った」と「役立たなかった・全然役に立たなかった」には 5%水準 (p < 0.02) で有意差あり

Table 6 役に立ったと思う場合、主にどのスキルに効果があったと思いますか。(役に立ったという中で%)

	listening	speaking	reading	writing	all skills
1年生	11	34	22	21	12
2年生	23	38	13	26	0
3年生	20	34	13	32	1
平均	18.0	35.3	16.0	26.3	4.3

Table 7 ずっと英語が好きですか (%)

	大変好き	好き	普通	嫌い	大変嫌い
1年生	6	32	48	11	3
2年生	7	44	31	18	0
3年生	0	37	59	4	0
平均	41.7	47.7	12.0		

「大変好き・好き」と「嫌い・大変嫌い」には 0.1%水準 (**p<0.001) で有意差有り

☆「未経験者」

Table 8 中学入学後、それ以前に学習していた方がよかったですか (%)

	非常に思う	思う	どちらとも言えない	思わない	全然思わない
1年生	6	16	37	10	31
2年生	20	10	25	25	20
3年生	5	47	18	6	24
平均	34.7	26.7	38.7		

「非常に思う・思う」と「思わない・全然思わない」には有意差なし(p<0.7)

Table 9 ずっと英語が好きですか (%)

	大変好き	好き	普通	嫌い	大変嫌い
1年生	3	19	47	18	13
2年生	2	17	35	16	30
3年生	11	12	47	29	1
平均	21.3	43.0	35.7		

「大変好き・好き」と「嫌い・大変嫌い」には、有意差はないが、差の傾向あり(p<0.06)

Table 10 成績の比較 1年(3クラス)

	模試		O C I N=111	
	経験者	未経験者	経験者	未経験者
Mean	49.1	45.5	70.3	53.2
SD	9.0	12.1	8.2	23.9
N	54	57	54	57
人数%	49	51	49	51
t-test level	*p<0.09 n. s.		***p<0.001 0.1%	

O C I = Oral Communication I

Table 11 成績の比較 2年(3クラス)

	模試		英語Ⅱ N=114	
	経験者	未経験者	経験者	未経験者
Mean	27.2	29.9	76.3	77.7
SD	10.9	13.3	9.4	8.8
N	72	42	72	42
人数%	63	37	63	37
t-test level	p<0.3 n. s.		p<0.5 n. s.	

英語Ⅱ = 総合的な英語

Table 12 成績の比較 3年(3クラス)

	模試		リーディング ^a N=120	
	経験者	未経験者	経験者	未経験者
Mean	33.6	36.3	68.5	70.9
SD	9.1	8.2	10.2	11.3
N	72	48	72	48
人数%	60	40	60	40
t-test level	p<0.2 n. s.		p<0.3 n. s.	

リーディング^a = 読みを中心とした英語

「中学入学以前の英語の学習」について、Table 1 の結果が得られた。「ある」と「ない」において、各学年間に有意差はない ($p<0.2\sim p<0.8$) が、全学年における「ある」と「ない」には 5% 水準 ($p<0.02$) で有意差がある。従って、学年間の英語学習の傾向には有意差はないが、全体として「経験者」は「未経験者」より、人数の占める割合が有意に多いと言える。

それでは、まず「経験者」の中で見ていくことにする(以下、数値は%)。Table 2 の「学習の期間」は、3年生は1年間が64と、他の学年とは少し異なるが、1~2年間で見ると各学年、傾向はほぼ同じである。すなわち、全学年84以上(平均で86)が1~2年間である。そして、「学習した段階」は、各学年ほとんどが5~6年生の1~2年間である(表は省略)。

Table 3 の「学習の手段」は、1年生で「学習塾」が63と多く、2年生の22、3年生の25とは異なる。「学校」では、1年生31、2年生67、3年生64で、やはり1年生と2・3年生では異なる。この2つの項目は、各々の学年において0.1%水準($p<0.001$)で有意差がある。ただし、聞き取り調査では、「学習塾」と「学校」は、ウエイトの置かれ方が異なるだけで、重なっている場合が多い、とのことである。また、活動内容については、「学校」では、ほとんどが「総合的な学習の時間」に国際理解教育ということでALTとゲーム・歌等をして英語の学習を行っていたようである。

「学習塾」では、(簡単な)テキストを用いて、学習をしていたとのことである。

Table 4 の「学習の頻度」については、各学年週1回が60.3で最も多く、次に週2回の25.3である。週1回と2回の合計は85.6で大多数と言える。

Table 5 の「以前の学習の効果」は、「大変役に立った・役に立った」(41.3)と「役立たなかった・全然役に立たなかった」(18.0)には5%水準($p<0.02$)で有意差がある。(各学年においても両項目に有意差有。)従って、有意に多くの「経験者」は「役に立った」と考えている、と言えよう。

Table 6 の「有効であった主な学習のスキル」については、5つの項目間には5%水準($p<0.03$)で有意差がある。各項目間の有意差検定は行っていないが、speaking が最も多く、writing、listening、reading、all skills の順である。ただし、この時期の writing は、綴り方や文字を写すことが多かったようである。

Table 7 の「ずっと英語が好きですか」において、「大変好き・好き」(41.7)と「嫌い・大変嫌い」(12.0)には0.1%水準($p<0.001$)で有意差がある。従って、「経験者」は「英語が好き」な生徒が、かなり有意に多いと言える。

次に、「未経験者」である。Table 8 の「以前に学習していた方がよかったか」について、「非常に思う・思う」(34.7)と「思わない・全然思わない」(38.7)には有意差はない($p<0.7$)。

Table 9 「ずっと英語が好きですか」において、「大変好き・好き」(21.3)と「嫌い・大変嫌い」(35.7)には有意差はないが差の傾向($p<0.06$)が見られ、「嫌い」な学習者がやや多い傾向であると言える。「経験者」とは異なり、逆の傾向が見られる。

ここで「経験者」と「未経験者」の「英語の好き・嫌い」の差について、さらに Table 7 と Table 9 を比較する。「経験者」と「未経験者」間に「好き」の項目(41.7 と 21.3)において 5% 水準($p<0.02$)、「嫌い」の項目(12.0 と 35.7)において 0.1% 水準($p<0.001$)で有意差が見られた。

(各学年においても両項目に有意差有。)従って、「経験者」の方が「未経験者」と比べると、「好き」が有意に多く、英語に対する興味・関心が有意に高いと言える。「嫌い」についての有意差も、このことを支持するものである。「普通」の項目には有意差は見られない。

次に、中学校入学以前の英語学習の成績への影響について述べる。Table 10 の1年生の成績では、「経験者」と「未経験者」には「模試」(49.1 と 45.5)で有意差はないが差の傾向($p<0.09$)があり、「O C I」(70.3 と 53.2)で 0.1% 水準($p<0.001$)で有意差がある。英語の運用能力を重視する科目で有意差が出たとも考えられる。「中学入学以前の英語学習」では speaking に効果があったと多くの学習者が感じているように、他の科目と比べて「O C I」では speaking を含む音声言語の訓練と評価もかなり行っている。2、3年生には「模試」「英語Ⅱ」「リーディング」ともに有意差は見られない($p<0.2\sim p<0.5$)。さて、1年生の「O C I」で有意差が出たが、これは「学習塾」での学習が有意に多かったからではなかった。実際の成績比較(「学習塾」と「学校」での学習者間)では有意差は見られなかった($p<0.9$)からである。

さて、前述のように「経験者」は「未経験者」と比較して「英語」が好きと言うのは有意に多い。これは、Table 7 の「経験者」の「好き」「嫌い」の項目間での 0.1% 水準での有意差でも、Table 7 と Table 9 の比較における「経験者」と「未経験者」の「好き」の項目間での 5% 水準の有意差および「嫌い」の項目間での 0.1% 水準の有意差からも明らかである。そして、有意に多くの「経験者」が「中学入学以前の学習は役に立った」のでよかった、と感じている。また、アンケートにおいて、「経験者」からは「楽しかった」「分かりやすかった」「面白かった」「やる気がでた」等、好意的な意見が非常に多く見られた。従って、「経験者」は「未経験者」と比べて、英語学習に対して大きな(主に内発的)動機づけを受け、高い興味・関心を持っていたと言える。

最後に、仮説の検証である。中学入学以前の(英語学習)「経験者」は「未経験者」と比べて「より英語の学習に興味・関心を示している」というのは支持されたが、「学力も高い」は1年生においては「O C I」で支持されたが、1年生の「模試」や2・3年生の「英語Ⅱ」「リーディング」や「模試」では支持されなかった。

3. おわりに

アンケート記述の中には、「未経験者」を中心に「中学入学以前に英語学習をしてもしなくても、できる者はできるし、できない者はできない」「先生によっても、好き嫌いが生じる」という意見が僅かある。しかし、全体的に「中学入学以前に英語を学習していた方が、興味・関心を持つと言う意味から有益である」との考えが多く見られた。そして、実際のデータ分析による効果にもそれが現れ

ていると言えよう。

佐藤(1999)、Takagi(2003)等によれば、中学入学以前に英語学習をしていた生徒は、真のコミュニケーション能力を身につけるのに効果的でないという理由から、教室内での英語学習に興味を示さない傾向が強いとも言われている。

今回、「経験者」は1年生の「OCI」においては、有意な成績上の効果も見られたが、全学年において、大きな動機づけを受けていたと考えられる。内藤(2004)の前回の結果では、「OCI」を含む全ての英語の科目において、中学入学以前の英語学習の成績向上の効果は見られなかったが、動機づけを受けていたことは同じ結果といえる。つまり、中学入学以前に英語を学習したことによって、たとえ英語の学習成績に反映されなくても、動機づけを受けていれば、その学習はある意味で成功したといえる。これは、柳・高橋(2001)の研究にも見られるし、松川(2003)も同じようなことを述べている。また、直山(2004)は「未知の言語の網の中を何とかぐり抜けようとする子どもたち、何とかぐり抜けた子どもたちは、ますます言語によるコミュニケーションに興味を抱き、心地よさを感じ、もっと英語を使って相手に自分の思いを伝えよう、相手のことを理解しようとするだろう。そういう態度を育てることも、小学校英語活動のねらいである。」と述べている。動機づけられた好ましい態度を育成することも、中学入学以前の英語学習の大きな効果であろう。

まして今回、全学年の「経験者」は動機づけを受けていたことに加え、1年生では「OCI」において有意な成績上の効果も見られた。中学入学以前に学習した内容そのものが高校での学習成績の向上に繋がっている訳ではなく、動機づけによって成績向上があるわけである。従って、1年生において成績向上が見られたのも、好ましい動機づけによるものであろう。中学段階において「中から中上」の生徒が入学してくるS高等学校の生徒について、上記の結果が得られた。今後、「上位」や「下位」の生徒も含めて、より詳細な研究をしたいと考えている。

(福井県立 鯖江高等学校)

引用文献

- Hatch, E. & Farhady, H. (1982). *Research Design and Statistics for Applied Linguistics*. 108-122, 165-172. Newbury House Publishers, Inc.
- Larsen-Freeman, D. & Long, M. (1992). *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. 114-152. Longman Group Limited
- 松川 禮子 (2003) 『小学校英語活動を創る』 2-35頁 東京：高陵社書店
- 文部科学省 (2001) 『小学校英語活動実践の手引』 2003年10月10日検索 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/02/010212.htm 1-16頁
- 内藤 徹 (1997) 『新しい 英語教育ハンドブック』 22-30頁 東京：リーベル出版
- 内藤 徹 (2004) 「早期英語教育に関して」 『鯖江高等学校 紀要』 No. 26 19-28頁
- 直山木綿子 (2004) 「小学校英語活動、益あり、害なし、よって必要あり、ただし、条件つきで」 『英語教育』 5月号 30-32頁 東京：大修館書店
- 大津由紀夫 (2004) 「公立小学校での英語教育に異議あり！」 『英語教育』 5月号 8-11頁 東京：大修館書店
- 佐藤響子 (1999) 「早期英語教育から何を期待しうるか：横浜市立大学生の意識調査より」 『横浜市立大学論集』 50. 113-146頁
- Takagi, A. (2003). The effects of language instruction at an early stage on junior high school, high school, and university students' motivation towards learning English. *ARELE Vol. 11*, 81-90.
- 柳 善和・高橋美由紀 (2001) 「中学入学以前の英語学習の影響：学習者による評価」 『中部地区英語教育学会紀要』 第31号 21-28頁